１１月２３日（日）召天者記念礼拝レジュメ
「聖書の語る永遠のいのち」　ヨハネの福音書３章１６節

人は死後に生命があると信じていた。古代エジプト人は、死者に対する彼らの扱いのうちに、バビロニヤ人は死を悲しく、陰気な存在として恐れたことのうちに、それぞれ死後のいのちへの信仰を表していた。
聖書では、人は死後よみに下ると言われている。よみ＝世を去った人の魂が、死後に集められる場所。キリストの復活を通してキリストにあって死ぬ者に大きな変化があった。

① 詩篇１６篇１０，１１節「あなたは　私のたましいをよみに捨て置かず　あなたにある敬虔な者に　滅びをお見せにならないからです。あなたは私に　いのちの道を知らせてくださいます。満ち足りた喜びがあなたの御前にあり　楽しみが　あなたの右にとこしえにあります。」
→信じた者はよみにくだっていくのではない。それでは、イエスキリストを信じた者はどうなるのか？

② コリント人への手紙第二５章８節「私たちは心強いのですが、むしろ肉体を離れて、主のみもとに住むほうがよいと思っています。

③ ピリピ人への手紙１章２３節「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。」と言われています。
→主のみもとへ行く。イエスキリストを自分の罪からの救い主として信じた方々は、一人一人が愛してやまなかった主イエスのみもとにいる。そこですべての重荷や痛みから解き放たれて、安らいでおられるのだろう。そのことは、先に天に帰られたお一人お一人にとって大いなる慰めであり、後に残されている私たちにとりましても何という慰めだろうかと思わされる。

今日の聖書の箇所に「一人として滅びることなく」とある。ここで言われている滅びとは、永遠に神から引き離されること。

④ ヘブル人への手紙９章２７節「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように」

さばきは、まさに永遠の滅び、永遠の苦しみですが、それにより、まさに神から永遠に引き離されることである。しかし「御子を（＝イエスキリスト）を信じる者が ～ 永遠のいのちを持つためである」と言われていますように、人がイエスキリストを信じるなら、罪が赦され、永遠のいのちが与えられる。それは、地上にあってイエスキリストとともに歩み、地上の生涯を終えても、その永遠のいのちを待って、主のみもとに住む、世を去ってキリストとともにいることができる。

神は、罪深い世に住む全人類に対して、私たち一人ひとりに対して、そのひとり子、すなわちイエスキリストをお与えになった。来週からアドベント、主の降誕を待ち望む節季に入るが、神は、救い主イエスキリストをこの地上に送ってくださり、私たちの罪のさばきの身代わりとして十字架につけてくださり、新しく生まれさせ、そして信じる者が神のさばきを免れ、滅びないで永遠のいのちを持つようにしてくださった。これほどまでに、罪ある者、ご自分を信じないで罪を犯し、滅びに向かう愛される資格のない者たちを愛してくださっている。そして、神の愛は、どんなに暗い状況の中でも決して希望を失わず、生きる希望と力を信じる者に与え、死後にも永遠のいのちの希望を与える。そしてその愛の証拠は、クリスマスに人となって生まれてくださったイエスキリストであり、その愛は、人をキリストにある新しい人生へと導き、死後にも永遠のいのちの希望を与える。